

タイ・マレーシア 生物調査隊に加わって

芦 田 讓 治

は じ め に

タイ・マレーシア生物相の調査という題で科学研究費の海外学術調査費を東南アジア研究センターから出したところ、幸い採用された。はじめの計画には、動物班といい得るほどのものもあったが、予算が削られたので、動物関係は国立科学博物館技官の上野俊一君ただ1人にしてしまった。植物のほうは既にかんりの標本を集めており、今度行ってしっかり採集・調査をすれば十分な評価をうけ得る成果を出すことができると考えられるので、動物と植物の両方が中途半端になるよりは、植物に力を入れてがっちり仕上げることにしたのである。もっとも気付かずにしたことであったが、動物学者を1人残しておいたので“植物相”の調査隊になり下がらずに、審査委員会で採択された題目通りの“生物相”の調査隊であると文部省に認めてもらうことができた。

植物隊に参加したのは、シダの専門家として京大理学部助教授田川基二君、同助手岩槻邦男君、コケの専門家として奈良教育大助教授北川尚史君、単細胞藻類には京大教養部教授平野実君、高等植物には信州大教養部助教

授清水建美君、科学博物館技官小山博滋君、京大大学院学生福岡誠行君、それに隊長のわたくしを入れて合計9人が研究費による調査隊である。それに京都薬大講師布藤昌一君が自己負担で加わって隊は強化された。彼は生薬の専門家であるが、薬になるならないにかかわらず植物採集をするエキスパートである。

わたくしは隊長として行ったのであるが、隊長としての役割りをすることもあり、大事にしてもらうお客のようでもあった。予算が計画より減らされたので、若い馬力のある人が行くほうがよいと思ったが、隊長を変えると審査のしなおしがあるというので行くことにした。もっとも、はからずも学部長になったので、長く留守にするわけにもいかず、現地指揮1カ月ということになり、7月31日からちょうど1カ月出張した。上野・平野両君は1カ月半、小山君は2カ月、他の6人は3カ月の予定であり、現在3班に分かれて活躍中である。

東南アジアの多くの国は、かつて植民地であったため、その生物相は宗主国によって既にかんりよく調べられているが、タイは独立国であったため、生物相がほとんどわかっていない。それでこの大きい盲点を調べようというわけである。

マレーの植物は英国がよく調べているが、タイの本部から半島部にかけて、だんだんマレーシアの植物が入りまじっているので、タイの植物調査をしっかりとしたものにするには、マレーシアの植物も採集し、生えているところを観察しなければならない。それで調査予定をタイ2カ月、マレーシア1カ月としたのである。ビルマや雲南に入れたら多くの疑問が解決できるのだろうが、あきらめるより仕方がない。

タイの植物については、高等植物はデンマークがやろうとしているが、全部やれるわけでもなかろう。わたくしどもの高等植物班は、

石灰岩地帯に主眼をおいているので特色が出せると思う。またわが隊は下等植物の専門家を強化しているところがミソである。

田川・岩槻・平野・上野の4君とわたくしは、7月30日に羽田をたってシンガポールとクアラルンプールへ行った。これはあとの採集旅行のスケジュールをたてるために、マレーに詳しい生物学者たちに相談したり、協力を依頼するためである。また上野・平野両君は、あとでマレーに来る時間がないから、いくらかでも採集と観察をしようという目的もあった。あとの若い5人は、8月10日にバンコクに到着し、先着の5人に合流して隊の編成を行なった。

シンガポール

シンガポールには、よく知られている立派な植物園がある。戦争中は昭南植物園と称せられ、郡場寛先生が園長をされたところである。園長のBurkill博士は英国へ帰って留守であったが、Chew（周偉力）博士という中国系の植物分類学者が園長代理をつとめていて、実に親切に説明をしたり、世話をした。まず標本室に案内されたが、数人の使用人を使って標本を作っており、標本はよく整理されていた。世界各地の標本室と交換の契約をしており、どこそことは何々のFamilyについて交換する、というふうに標本ができるに従ってそれぞれ送るべき宛名の箱へ入れるようにしている。向こうから来るのも、こちらから送るのも、協定した同じ大きさの箱を使っているので整理がひじょうにうまくゆくということであった。その周さんがマレーの山の状況について詳しく話をして、採集計画の相談に乗って下さった。マレーの詳しい地図がほしいといったが、今シンガポールでは、シンガポールの地図しか手に入らないということで、シンガポールの地図を翌日までに買っておいしてくれた。

ヒルを防ぐ薬が是非必要だが、Dimethyl-phthalate がとてもよく効く。ヒルは口か何かの粘膜が強く刺激されるらしく、靴やズボンあるいは足にこの薬を塗っておくと、そこを越えることができない。人間もこの薬が粘膜にふれるととても痛い。水に溶けないから、水で洗っても落ちないが、石鹼では落ちる。これを持ってゆくべきだといって周さんがほうぼうに電話をかけたあげく、やっとある薬屋で数リットルを手に入れてくれた。案外買いにくいもののようなのである。実際あとからタイの半島部へ採集に行った連中に聞いてみると、ひじょうによかったとのことであった。

植物園のcuratorはA.G. Alphonsoという人で、お母さんは小倉出身の日本人であるという。この人は戦争中にも植物園にいたが、郡場先生が植物園と標本室の保全に努力され、またスタッフに対してひじょうによくしてくれたといっ、わたくしが郡場先生の後継ぎだといっ、先生に住んでおられた官舎にも案内してくれた。当時の園長の執務室が今も園長室で、周さんが事務をとっている。戸棚や机など、みなしっかりした木で作ってあって当時のままだそうである。郡場先生への賛辞をきくこと自体はうれしいのだが、それは血税問題や市民犠牲者の碑から想像される事態が植物園の外で進行していたことを背景にもっているわけであるから、体じゅうがむずがゆい思いであった。

周さんの運転でBukit Timah（戦争中によく聞いた地名だ）にある自然保護地域の熱帯林を見せてもらった。不勉強ながら、本の上で想像していた熱帯降雨林を実際に見て、感無量であった。National Museumにも標本が若干あるといっ、ので出かけた。このcuratorは淡水魚の分類をやっている人で、それ以外のことにはいっ、こう興味がないらしく、人類学的なものもいろいろあるが、ほこりだらけで積んである状態だった。シンガ

ポール大学もあるが、大して標本もないし、会すべき人もいないので行かなかった。

マレーシア

次にクアラルンプールへ行った。ここには University of Malaya がある。植物学教室主任の Ann Johnson 博士はわたくしどもの行く頃にはクアラルンプールにいないという返事をもらっていたので、英国へ帰ったのかと思っていたら、夫君がシンガポール大学の動物学者で、われわれがシンガポールにいた時来ておられたらしく、それならシンガポール大学へ行けば会えたかもしれないのに残念だった。

分類学者の Benjamin C. Stone 博士は米人だが、奥さんが日本人で、名刺の裏には石辨蛇民と書いてある。彼は「シダの分類で偉い人は、世界中で片手の指だけしかない。その内 2 人がいまここにいる（田川・岩槻両氏をさす）」といって上気嫌で、交通公社が予約しておいた Hotel Merlin は高すぎるから、安い宿にかわれといって、荷物の輸送までしてくれる始末であった。Templer Park, Bat Cave, Wulu Valley などへ Stone 氏自身の運転で連れていってもらった。Templer Park はクアラルンプールからあまり遠くない自然保護地区である。Bat Cave は石灰洞で、上野氏はほら穴の虫に興味があるので奥のほうまで入って行って、なかなか収穫があったそうである。その間に平野氏は Stone 氏に運転してもらって、池のあるところを採集してまわった。Wulu Valley にはマラヤ大学の宿泊施設が森の中にあり、学外の研究者も利用できるそうである。そばを川が流れており、上野氏も熱心に採集していた。

マラヤの地図は、今の状態ではかなり入手困難で、地理の先生の証明があれば買えるかもしれないということであったが、だめであった。

Johnson 博士の Malaysian Botany という本は、マレーで植物学の初歩を教える教科書であるが、この本の扉に Melastoma という青い花の写真がのっている。ところが実際に Melastoma を見ると、むしろ赤と違ってよいような色なので、これは Johnson の本の花の色とだいぶ違うということ、Stone 氏は、あれはカラードリットが下手だからで、日本のカラードリットは良いから、自分の本を作る時は日本で印刷すると言っていた。Johnson の本はどこでプリントしたのかと思ってひそかに見ると、Printed in Japan とあった。

マラヤ大学で、Rhagavan 博士というインド系の人に出会った。この人は、シダの胞子が発芽したものが、はじめは一次元的に成長するが、ある時には二次元的に成長するようになる。この現象について核酸の関係を研究している。アメリカから数カ月前に帰ってきたというが、研究を進める準備をしているようであった。学生の読書室に繰って読むパネルが立ててあったが、それを見ても相当高級なことが書いてあった。

タイ 国

次にバンコクへ来た。ここで予想外に手間がかかったのが通関である。水曜日からはじめたが、土曜日が休みで、しかもその日が王妃の誕生日と重なっていたのでそのふりかえで月曜日が休みになり、3日間blankができて、次週の火曜水曜とかかってやっと通関した。手間どったもう一つの理由は、食料品の持ち込み問題であった。通関を容易にするために依頼した NRC の書類には学問研究用のものは無税通関となっているが、食料品は別となっていた。ところがわれわれの荷物にはインスタントラーメンやかきもちがはいっていたからいろいろな手続きでずいぶん時間がかかった。NRC でいつも親切に取り計ら

って下さる Boontom さんに、食料品で通関に手間どったことをそれとなく話したら、食料品は大丸（バンコク支店）ででも買うほうがよいでしょうとの返事であった。

旅行に出るには、ビザの延長の手続きのため旅券をバンコクに残して、identification card を持ってゆくことになるが、これには NRC の Netr 長官のサインが必要であるため、Netr さんの都合でいつになるかわからないことがある。運よくわれわれはすぐにもらえたが、あとから着いた人達はそれだけもらうのが遅れた。しかし出発予定の前日に identification card とビザの延長もでき、夕方には通関も終わったので、大急ぎで荷物を仕分けして予定通り出発することができた。

ある日、NRC のおもな人達を招待しようとしたが、みな都合が悪く、人文科学関係の副長官 Prasat 博士だけになった。タイの青年で科学を志す者が少ないことや、教育のことなどいろいろな話を聞いた。話の中に米のプレミアムの話があったが、これなどは当局者としてはいいにくいことであったそうである。彼は元来数学を勉強していたのであるが、今はタイ民族の由来をことばの面から研究しているという。

別の日に、NRC の自然科学関係の副長官 Pradisth 博士の所へあいさつに行った。彼は酵素学の Sumner の所で研究をしたという。その時の研究の話をして、実に楽しそうであった。また Forestry Department の Dusit 所長に会ったら、植物の名前がわからなくて困っているから、われわれに大いに研究してほしい、また若い人の training の一助にもなってほしいという話であった。分類学の専門家は、日本にも来たことのある Tem 氏である。彼はほんとうはもっと出世できる人らしいが、出世すれば事務ばかりやらされ、好きな分類ができなくなるので地位を変えずにいるらしい。しかし彼は常用とデラックス

と自動車を2台も持っているから、今の地位でもかなりの待遇を受けているのであろう。チュラロンコン大学の Kashin 氏も分類学者であるが、彼は教えるのが忙しいらしい。タイ国で植物分類学の主な人物はこの2人で、これでは今のところ、タイの植物調査は外国にたよるほかはないであろう。

調査隊が南タイへ行っている間に、わたくしは単身北へ行ってみた。ちょうどその頃、Kashin 氏が Chiang Mai 大学へ集中講義に行くというので、彼がいる間にとまって Chiang Mai 大学へ行った。講義は午前中だけだが、日曜日もやっていた。彼が Chiang Mai 大学の植物学専攻の学生を連れて近山歩きをした時、一緒について行ったが、学生達はほがらかで、かしこそうであった。Kashin 氏の弟子の Pijit 氏が Chiang Mai 大学の先生をしているから、今後何かと頼むことができるであろう。彼は Chiang Mai 大学の標本室をこれから作ろうとして採集を始めているが、教えるのが忙しくて文献を調べる暇もないとこぼしていた。生物学の教授がまだおらず、植物生理学には若い英国人がコロンプランで来ているという。この大学は3年前にできたので、いま3年生までいるのであるが、教養課程や pre-medical の学生の生物学の授業全部を数人で持たなければならず、とても忙しいといていた。それは人材の問題か金の問題かと聞くと、金さえあれば外国からでも人は呼べるという。

カセサート大学の林学の教室も訪ねた。標本室に行くと、例えばシダのアルバムが数冊あったが、子供がちょいと搞んできたような標本で、岩槻君が見てみると名前もずいぶん間違っているようであった。

植物生理学の現状をみようと思って、アメリカで Ph. D. をとった Tasami という女の人をタマサート大学の構内に訪ねてみた。アメリカでイオン吸収の研究をした人だが、帰

ってくると器具が何もなく、なかなか買ってもらえないし、また注文してもなかなか来ないので、結局2年間研究らしいことは何もやっていないようで、今はツェイスから借りた顕微鏡を使って栽培植物の染色体を見て、細胞遺伝学をやりつつあった。

また衛生研究所の下村猛さんを訪ねたが、そこでは植物組織を少し習っただけのような女の子を使っていたが、分析も思うようにできず、仕事がやりにくくて困っているという話であった。それに1人だと植物の生えている森に入ろうと思っても入れないから、やはりグループで来ないとだめだという。

バンコクに Faculty of Medical Sciences という京大の法経教室よりもう少し大きい建物3棟が建造中である。これは、建物はタイ国が200万か300万ドルを出し、室内の実験設備と指導者はロックフェラーが供給したものである。その目的は、タイの基礎医学の研究者を養成することであり、養成が進んでくに従って、だんだんロックフェラーの人員を減らしてゆく予定だそうである。ここでは毎年64人を graduate course に入れる。この64人というのは4の倍数で、実験室も4人ずつ、勉強する室も4人ずつで、それらが16ずつある。しかしスタッフに良い研究者が来てくれるのかと聞いたところ、実験設備さえ立派にして研究がよくできるようにすれば人は集まるということで、彼らの意気込みのほどがうかがわれた。

次に余談になるが、Doi Suthep の離宮に、日本人が寄贈したという小さい桜の木があった。3本だけ目についたが、いずれも瀕死の状態であった。あの辺りで冬は5°Cくらいになることがあるとはいえ、寒い期間が短く、また暑い季節に葉温が上がりすぎるせいではなからうかと想像した。

台 湾

帰途、台北を訪ねた。台北には台湾大学がある。学生数約1万人、大きな大学は台湾中でこれ一つである。この農学部森林系主任の劉棠瑞さんは、京大で植物学をやった人である。なかなかの勉強家で台湾の樹木フローラの著、上下2冊を出し、次は草本を書くと言っていた。理学部で生化学担任の林 (Lin) 教授は、アメリカで植物のリボソームの研究をしてきた人であるが、帰国後は実験装置のいらないテーマを考えて研究をはじめている。また遺伝学と植物生理学担任の于景謙教授は、京大農学部出身の活動家。分類学の許建昌さんは東大に留学し、最近理博をとって帰った好青年である。劉さんは森林系の年長教授で主任であるから、いったい幾らくらい給料をもらっているのかと聞いてみたら、日本円に換算して約3万余円だという。もっとも、宿舍が与えられ、無料バスがその宿舍と大学の間を往復し、米と油は配給される。しかし、それでもとても足りないそうである。

自然林が見たいと劉さんに頼んだところ、南郊外の烏来に案内してくれた。ここには最近、台湾で初めての空中ケーブルがついて、山のほうへも行くことができた。陽明山、むかし草山といった山へも行ったが、雨に降られて、あまりよく歩けなかった。

お わ り に

田川・平野・上野の3君が、Chanthaburi 方面へ採集に出かけた際、自動車が転覆して、上野君は右手上膊骨折、田川・平野両君は腰を打った。この事故で多くの方々にご心配をかけて申し訳なかった。しかし幸い回復が早かったので調査は順調に進んでいる。残りの期間中、無事に調査目的が達成できるよう、神だのみでもしたい気持である。

(1967年10月9日)